

アナタの花粉症ってホントにホント?!

意味深なタイトルで恐縮ですが…実はこれって結構あなどれない話です。花粉症が目に来る場合の症状としては、メヤニがでる・涙がでる・痒くなる・赤くなる・瞼が腫れる・ゴミが入ったか、まつ毛があたっているようにゴロゴロする(実際には何も入っていません)・目がかすむ(視力低下)などが挙げられます。これにくしゃみ・鼻水が加わり、時期的にスギ花粉の飛散があるシーズンにおこった症状である事、さらに診察所見(充血・瞼の裏側の白目の凸凹など)を加味して目医者は「貴方はスギの花粉症ですね」と診断を下すわけなのですが、「カゼ」をひいた場合にも同様の症状がみられる事から「誤診」をしてしまっているケースも多々あるものと思われます。(実際には「例年はどうですか?」という病歴を聴取することでおよその見立てをしている事が多いのでそんなに診断が誤っているケースは多くないとは思いますが…)そこで、花粉症の証拠として有力な情報となるものは「血液検査」という事になります。耳鼻科やアレルギーの専門内科の先生にかかられた事のある方はわかると思うのですが、採血をしてそれを調べて(結果が出るまでに一般的には数日かかることが多いようです)どういう抗原(アレルギー反応のもとになる物質)に反応しやすいのかを調べる検査で「スギ」とか「ヒノキ」とか「ハウスダスト」といった項目が調べられる事が多いようです。もちろんこれだけでは事実間違いはありません。しかし、眼科の結膜炎のみをきたすような花粉症の患者さんは、こうしたアレルギー採血の結果が「陰性」になることが多くあると言われています。理由はよくわかりませんが、目にのみ反応をするようなケースは全体としてのアレルギー反応は強くないためなのかもしれません…。となると、花粉症の結膜炎の診断はどうするのか?という事になるのですが、単なる患者さんの自覚症状と、症状が出現したタイミングと花粉の飛散状況との相関、所見としての結膜(しろめ)の状態から「総合的に眼科医が診断を下す」

という事になります。賢明な我が「フジタガンカニュース」の読者の方々ならばすでにお気づきのこと存じますが「随分と曖昧な状況の中、診断と治療が行われている」というのが実態なわけです。アレルギー専門のクリニックであれば、皮膚に抗原を投与したりだとか、メヤニを染色して顕微鏡で白血球の種類を確認したり(アレルギー反応では好酸球という白血球が見られます。当院でもこのメヤニの白血球を顕微鏡で検査することはできますが、明確な結果に至らないこともあるのです(>_<))というやや専門的な検査もあるのですが、近年「涙を採取して簡易的にIgE※1」というくアレルギー反応がおきているかどうかを証明するタンパク)を検出するキット」が発売となっております。検査も保険適応となっておりますので自信を持って



「貴方の目の症状はアレルギー反応ですね」と診断をすることができるようになりました。アレルウオッチという検査キットなのですが、この検査は当院にて行う事が出来ます。さらにご希望があれば、アレルギーの採血検査も当院にて行う事が出来ます。と、長々と専門的なことを語ってきましたが、「今まで花粉症の症状は無かったが、最近なんだか目がしょぼしょぼする」とか「明確な診断は無いが、なんとなく自分は花粉症だと思っていた。この機会にはっきりさせられるのなら、調べてみたい!」なんて思われる方もいらっしゃると思います。もしそんなご希望があるようなら、当院にて検査される事をお勧めしますヨ。※1…免疫グロブリンE

ンE(めんえきーE、英語: Immunoglobulin E、IgE)とは哺乳類にのみ存在する糖タンパク質であり、免疫グロブリンの一種である。1966年、日本人である石坂公成はジョンスホプキンス大学(アメリカ)においてブタクサに対してアレルギーをもつ患者の血清からIgEを精製した。健康人における血清中のIgE濃度



携帯サイト用QRコード

<http://www.fujita-ganka.com>

はng/ml単位であり他の種類の免疫グロブリンと比較しても非常に低いが、アレルギー疾患を持つ患者の血清中では濃度が上昇しマスト細胞や好塩基球の細胞内顆粒中に貯蔵される生理活性物質の急速な放出(脱顆粒反応)を誘起する。これらのことからIgEはヒスタミンなどと並んでアレルギー反応において中心的な役割を果たす分子の一つとして数えられる。分子量188kDa。